教える側の「理想とする授業」と学ぶ側の「好きな授業」
―質問紙による実習生、教員、学生の意識調査から―

田中亜子

要　旨

日本語教育・日本語学習の実践において、教える側と学ぶ側がそれぞれどのような教育観・学習観を持っているのかを明らかにすることを目的として、①教育実習生、教員が「理想とする授業」、②学生が「好きな授業」について質問紙による意識調査を行った。

その結果、教える側の「理想とする授業」は、授業経験の多少によって特徴が見られた。授業経験の無い実習生は学習者の情意面を重視する傾向があり、教え始めて3年以内の教歴の短い教員は学習者の認知面や授業の雰囲気に言及していた。これに対して、教歴の長い教員は、学習者がどのように授業に参加すべきかという観点から「授業運び」「内容」「方法」に関する具体的なアイデアを報告しており、成功した授業経験から理想とする授業のイメージをより明確に持っていることがわかった。

学ぶ側の「好きな授業」は「たくさん話せる授業」であるが、具体的には、(1) 社会のニュースや学生自身の体験を語り合うことによって教員や他の学生たちと意見を交換し合える授業、(2) 日本や日本人についての理解を深められるような授業が「楽しく面白い授業」であると報告された。

【キーワード】 教育観、学習観、教員養成、教員研修、実践的知識

What is an "Ideal Class" for Teachers, and a "Good Class" for Students?
— an examination of the consciousness of preservice teachers, teachers, and students using a questionnaire —

Tanaka, Ako

Abstract

This study investigated the views of preservice teachers, teachers, and students about teaching and learning. Findings indicate differences between preservice teachers, beginning, and experienced teachers. Preservice teachers place importance on learners' affections. Beginning teachers refer to learners' cognition and class atmosphere, while experienced teachers have practical knowledge about managing, content, and method. The main elements of a good class for students are to be able to discuss a topic with each other, and learn about cultural differences. Implications for future research in classroom research are discussed.

1．はじめに

近年、日本語教育の実践のあり方について、新たな方向性を見出そうとする論議が高まりつつある。2001年度日本語教育学会秋季大会においては、『「文化」をどう教えるか―日本語教育と文化リテラシー―』と題したシンポジウムが開かれ、異文化間教育としての日本語教育について、その目的と方法が議論された。また、グローバル化が進む社会状況のなかで、文化人類学、心理学、教育学などからの知見を受け、新しい学習観に基づいた日本語教育への転換が提言されている（西口1999、小澤2000、など）[1]。

「教育」と「学習」の意味を問い直すこうした新しい考えは日本語教育のカリキュラムや教材の内容、教育方法や評価方法、教員養成や教員研修のあり方の再考を迫るものである。しかし、これまでの日本語教育の内容と方法のどのような点に問題があるのか、必ずしも明確であるとは言えない。そこで、現場の教員が感じている問題点や、学習者が望んでいる学習内容と方法を分析することによって、新しい学習観に基づいた日本語教育の意義を明らかにする必要がある。ここでは、日本語教育・日本語学習の実践を、教員と学生とが出会う教室での授業に限定して、教える側と学ぶ側のそれぞれが考えている「理想の授業」を質問紙調査によって探り、教育実習生、教員、学生が日本語の授業についてどのような意識を持っているのかを明らかにしたい。

初めに、教育実習生、及び、教歴の短い教員、教歴の長い教員の「理想とする授業」について調査結果を報告する。次に、学生の「好きな授業」に関する調査結果を報告し、学生の具体的な記述から望ましい授業の要素について考察する。最後に、今後の課題を検討する。

2．調査の概要

2．1　実習生、教員を対象とした意識調査の概要

調査対象：大学院で日本語教育を専攻している実習生、日本語学校及び大学の日本語講師

実施時期：2001年9月

調査方法：質問紙を配布し、自由記述による回答を求めた。

質問紙の内容：①下の空欄に思い浮かぶことばを記述してもらう。

わたしは「　　授業」をしたいと思っている。

②それが具体的にどのような授業であるのかを自由に記述してもらう。

回答者の概要：

・実習生　計8名　―　授業経験無し3名、プライベート以外の授業経験無し2名、教歴1～3年3名（1）

・教員　　計12名　―　教歴約1～2年5名、9～15年5名（1）、16～20年2名（1）

※（　）内は男性数

2．2　学生を対象とした意識調査の概要

調査対象：東京都内の日本語学校で学んでいる在校3ヶ月～約2年の学生[2]

実施時期：2001年9月

調査方法：質問紙を配布し、自由記述による回答を求めた[3]。

質問紙の内容：①下の空欄に思い浮かぶことばを記述してもらう。

わたしは「　　授業」が好きだ。

②それが具体的にどのような授業であるのかを自由に記述してもらう。

③好きではない授業について自由に記述してもらう。

回答者の概要：

・学生　計102名　―　レベル：初級レベル39名、中級レベル40名、上級レベル23名[4]

出身：韓国48名、中国（香港を含む）48名、台湾3名、バングラデシュ1名、無記入2名

性別：女性47名、男性46名、無記入9名

3．結果

3．1　教える側の「理想とする授業」

(1) 実習生（授業経験無しの実習生）

表1．実習生の「理想とする授業」

学習者が眠くならない授業	（文法ばかりでなく、ゲームなど学習者の興味を起こさせるものを加える。学習者と先生の間の距離を短くしたい。学習者が自分の発話を抑えないで、積極的に先生に質問したり話したりしてほしい。先生と学習者のお互いの信頼感を築きたい。）
役に立つ授業	（学習者のニーズを理解する。教えている場所（日本／国外）によって、違う。教室で学んだことを生活で生かせる（日本の場合）。使える表現。）
楽しい授業	（自分の考えていること、伝えたいこと、また世間話でも、①表現したいという意欲、②それができた時の達成感、③そのための文法知識であるということを学習者が認識していること、を大切にした授業。インフォメーションギャップを利用したアクティビティーを多く取り入れることなど。それも雑談の延長のような感じでとり入れることができたら楽しいのではないか。例：過去形を習ったときに子供の頃の話をする。）
学習者が満足できる授業	（学習者のニーズに合っている。学習者の疑問に適切に答えている。学習者が積極的に授業に参加できる、参加する気になる。学習者が授業に出席するモチベーションを失わない。）
人間味のある授業	（教える側と教わる側に人間としての「つきあい」の存在する授業をしたい。それには学生ひとりひとりの「学生としての側面」以外のところにも常に関心をもっていることが大切な気がする。）

実習生が語る理想の授業には、「学習者」ということばが数多く用いられている（表１）。また、「興味」「達成感」「参加する気になる」といった情意面についての言及、さらに、「信頼感」「人間としてのつきあい」など、教員と学生の関係性について述べている。これらは、教員養成課程で実習生たちが学んできた学習観の影響をうかがわせるものである。

(2) 教歴３年以下の実習生、教員

表２．教歴が短い教員の「理想とする授業」

使える日本語を
身につけさせる授業（文法は、その性格をわかりやすく伝え、かつ普遍的な例文を用いて教える。説明は最小限にとどめ、（いつ／誰に）を明確に理解させる。）
学習者が自発的に
発話する授業（学習者により自然な形で日本語を習得してもらいたい。学習者を常に主役にして授業を進める。学習者の集中や言葉に対する興味が自然に高まっていくような授業。常に適度な緊張感が教師にも学習者にもある授業。）
楽しい授業（学習者に心理的な負担や不安を与えない（感じさせない）。学習者の自由発話（自主的な）の多い授業。コミュニカティブ―特に実生活への拡張が可能で、「授業―日常会話」の差を感じさせないもの。明るい。教師は仲間。）
役に立つ授業（学習者のニーズにこたえられる授業。教室外で運用できる日本語の力を身につけられる授業。学習者に「役に立つ」と思ってもらえる授業。）
集中できる授業（どうしたらいいのか悩んでいる。）
テンポ（リズム）
のある授業（教師自らはきはきとした声を出し、学生を引っぱっていくような雰囲気のある授業（ダラダラすると学生の集中力を欠く）。手際よくスムーズに進めるための準備がきちんとなされており、流れのある授業（教師が手間どっていては学生に不安を与えかねない）。上手に会話を引き出せている授業。授業にテンポを出すことによって学生が勢いに乗れる（主体的に発言しやすい）雰囲気を作り出すことができるし、発言が増えれば学生が自身の頭で考える機会が多くなる。）
話題の広がる授業（少ない文型の中でも柔軟に多くの話題を取り入れられる授業）
帰宅して内容が
思い返せる授業、次の授業に行きたくなる授業（楽しめる（楽しければいいとは思わない）。何をやっているのか分かる。満足感がある。授業中に理解できる（分からない点が残らない）。）

教歴が短い教員の考えに見られる特徴は、「わかりやすく」「授業中に理解できる」など学習者の認知面（理解度）に言及していること、また、「適度な緊張感」「明るい」「勢いに乗れる」など、授業の雰囲気に関する理想が述べられていることである（表２）。

実習生と比較すると、教員自身の行動について多く語られており、授業運営上の悩みも報告

されている。難しさの一つは、学生と教員に一体感のある授業をつくることである。例えば、「集中できる授業」について述べた教員は、次のような悩みを報告している。

・最近、学生の集中力がなく、どうしたらいいのか悩んでいます。楽しい授業を…と思っても、脱線してしまうのが嫌で、なかなか楽しく集中できる授業ができないので、とりあえず今は学生が集中できる授業をしたいと思っています。

また、「話題の広がる授業」を目指している教員は、初級レベルの授業で学生の話を十分に引き出すことの難しさを報告している。

・初級の授業の時は決まった文型を使うためか、話題が狭くなりがちだったような気がします。新しい話題をだしても、存分には学生の話を引き出せなかったりなど。少ない文型の中でも柔軟に多くの話題を取り入れられる授業がしたいと思います。

(3) 教歴9年以上の教員

表3．教歴が長い教員の「理想とする授業」

日本語が使えるようになる授業	（学生が自ら積極的に発信できるようなクラスの雰囲気づくりが重要。互いに刺激し合えれば、なおよい。）
学生が主体的に参加できる授業	（教師主導でなく、学生に考えさせる授業。）
しっかりした授業	（ポイントを押さえ、饒舌でない授業。間延びしない程度の話の展開。）
楽しい授業	（教員の一方通行の授業ではなく共につくりあげる授業。動きのある授業（学習者参加型授業）。めりはりのある授業（学習者にpoint、教員の意図が通じる授業）。）
学習者が主体的に日本語を使って、何かをする（タスク）授業	（「4技能」を学習者が主体的に使うこと。）
考える授業	（知的な共有できるものをみつける）
楽しく分かり易い授業	（学生が分かりにくいところを、分かるように教える。学生と一体になって授業を成功させる。）

教歴が長い教員は、より簡潔な独自のことばで理想の授業を語っており、各自のスタイルとも呼べる授業方法を持っていることがうかがえる（表3）。また、「互いに刺激し合う」「共につくりあげる」「学生と一体になって」のように、教員と学生、あるいは学生同士の関係のあり方について述べている。教歴3年以下の教員が学生の認知的な理解度と授業への集中度に関心を払っていたことと比べると、学生が「どのように」授業に参加すべきかが重視されている。また、教歴の短い教員にとって困難であると報告された「集中できる授業」「話題の広がる授業」について、教歴の長いある教員は、「間延びしない程度の話の展開」という表現で述べている。

さらに特徴的なことは、授業をどう進めるか、教材として何を用いるか、どのような練習方

法をとるか、について詳しく報告されていることである（表４）。これは、経験を重ねてきた教員が「授業運び」「内容」「方法」という点で経験の少ない教員よりも具体的なアイデアを持ち、また、経験によってどのような授業が成功する授業なのかを知っているということである。

表４．教歴が長い教員が理想とする授業の方法

日本語が使えるようになる授業・・・	日本語のインプットとアウトプットの量を多くする。 新しい項目の導入から、内容（意味）のある文章、会話へと授業を進める。語彙は、語句の成り立ちから派生するより、テーマごとに派生するほうがよいと思う。
学生が主体的に参加できる授業・・・	導入は簡単にし、適切な状況を設定した上で、同じ練習でも練習のバリエーションを工夫して、何度も口頭練習させる。ペア、グループ等々を上手く使い、あきないように配慮する。ドリル練習も単調にならないように、口頭→書く→答えあわせ、のようにする。発展の段階では自由にshort skitを作らせ、発表し、評価する。自由に表現したい気持ちを大切にする。
学習者が主体的に日本語を使って、何かをする（タスク）授業・・・	例：不動産屋でアパートを探す、携帯電話の特徴・使い勝手などを調べて買う（申し込む）、近隣の公園・公共施設を利用するに際して、日本企業での外国人採用状況を調べる／面接に備える、日本の祭り／芸能、etc 教師がある程度の資料を集め（あるものは資料集めから学習者に）、それに基づき、学習者が調べる、問い合わせる、インタビューする、教室内で発表する、感想文を書くなど「４技能」を学習者が主体的に使うこと。
考える授業・・・	学生 → （教材を）日本語で理解する ⇒ テーマを自分でみつけ、考える ⇒ 教員と５分で討論する ⇒ 知的な共有できるものをみつける

３．２　学ぶ側の「好きな授業」

(1) 学生はどんな授業が好きか

わたしは「　　授業」が好きだ。

学生が上の空欄に書いたことばは、６つのカテゴリーに分けられる（表５）。最も多かったのは、「話すこと」に関する記述であった。

表５．学生の「好きな授業」

①「たくさん話せる授業」(「会話中心の」「できるだけたくさん会話をする」など)	49名
②「楽しい（面白い）授業」(「たのしい」「おもしろくてたのしい」など)	19名
③話すこと以外の活動に関するもの（「聴解」「作文」「文法」「ビデオ」など)	18名
④楽しさ・面白さ以外の授業の性質に関するもの（「気楽な」「変化に富む」など)	7名
⑤教員に関するもの（「○○先生の」「個性がある先生の」「優しい先生の」など)	7名
⑥その他（「全部の」「いろいろな」「金曜日の」など)	4名

※①と③について、「会話や作文」のように答えた学生は重複して数えた。

(2)「たくさん話せる授業」はどんな授業か

「話す授業」についての記述をみると、学生が好きな「たくさん話せる授業」というのは、単に練習量、発話量が多いというのではなく、自分のことや自分の考えを表現する機会の多い授業だということがわかる（表６)。

表６．「たくさん話せる授業」とは

- 例えば毎日の一番大きなニュースについて、会話にします。私はもっと勉強したいのは教科書の内容だけではなく、日常生活の中いつも使われた言葉です。
- 学生が勉強した単語と文型をできるかぎり使って、学生自身のことを表現する練習がいちばんいい。
- ただ何人かが一つのグループになって、いろんな話しをしてたんですけど、おもしろかったんです。わからない言葉とかは先生に聞きながら…。
- できるだけ学生がもっている考えを述べるようにする授業。
- 新しい単語を教えるとき、できるだけこの単語を使って自分が言いたいことを自由に話せる授業。

(3)「楽しい（面白い）授業」はどんな授業か

学生にとっての「楽しい（面白い）授業」とは、どんな授業だろうか。一つには、表６で示したように、自分のことを自由に話してクラスの仲間と情報交換・意見交換できる授業が楽しい授業である。もう一つの要因として、「日本や日本人について知る」ことができたとき、学生は「楽しい」「面白い」と感じている（表７)。

表７．「楽しい（面白い）授業」とは①　－日本を知る授業－

・普段の日本人の生活の中のおもしろいことを教えてくれる授業（文化の違うところとか）。 ・日本のいろいろな文化や、日常生活から興味を呼びかけるような授業。 ・日本人の習慣と文化まで紹介して説明してくれる授業。 ・日本文化（他の国との差）を話してもらえる授業。 ・たとえば、日本の昔話とか、日本の文化について勉強することができておもしろかったです。 　日本についてすこしでも知ることができてよかったです。 ・知らなかった日本人の習慣、考え方を聞いて、自分の思うことを話すこと。 ・例えば日本の文化と他国の文化の違う点を比べること。 ・日本で起こっている事について議論すること。

ある学生は次のように述べており、日本を知ることの必要性を強く感じている。

・私たちは日本へ来たばかりだから、まず、日本語の勉強はもちろんだ。しかし、私たちは生活している。必ず、日本の社会を理解しなければならない。生活と学習をするために、文化交流するために、未来のために……。

また、次のような具体的な提案や、教員の態度に対する要求もあった。

・今、学生たちは日本に住んでいるので、授業時間に生活についてもっと教えてもらいたいです。関心があるので、もっと勉強がしやすいと思います。例）東京の近くのどこかへ行く、 現在のテレビのドラマなど、今、学生たちが住んでいるところについて……。

・先生の方も、私たち外国人の文化や習慣をすこしだけでもいいから理解してほしい。

一方、「説明が詳しく、分かりやすいこと」も「楽しい（面白い）授業」の一因であった（表８）。「分かりやすさ」に関する回答は初級レベルの学生に多く見られ、日本語学習の初期の段階では理解の程度が授業の楽しさと関連していることが示唆された[5]。

表８．「楽しい（面白い）授業」とは②　－分かりやすい授業－

・新しい言葉と文法は面白くて詳しく教えてもらったら覚えやすくなると思います。 ・しっかり練習して先生に詳しく説明していただきました。 ・いろいろ例文を使って、先生は一生懸命授業を面白くします。 ・文法と使い方を詳しく説明してくれる授業 ・一つの文法についてできるだけ多くの例文を挙げてもらえる授業 ・ことばについていろいろな例文とか歴史も考えてくださって、私は本当におもしろかったです。 ・授業のとき、明るいし、詳しい。 ・すごく詳しいから、わかりやすい。 ・何を質問してもすぐ答えてもらえるし、説明する内容も詳しくて分かりやすい。 ・絵がいっぱいかいてあるプリントで勉強したいです。分かりやすいし、覚えやすいから。

(4) 学生はどんな活動が好きか

学生が好きだと答えた活動内容は、学生の個性によってさまざまである。列挙すると、ビデオ視聴、スピーチ、発表（ロールプレイ）、聴解、テキストの分析（読解）、短文作成、作文などである。そのなかで、ビデオを使った学習が好きであると答えた学生が比較的多かった（7名）。ビデオを使った学習が好きな理由として、「日本生活で使うことばを楽しく自然に覚えられる」ことが挙げられており、「日本や日本人について」「楽しく」学べることが好まれる要因であると考えられる。

その他、要望として、おもしろい文章を読む、まんがを使う、映画を使う、歌を使う、ゲームをする、野外活動を行う、音声面のチェックを行う、などの活動がもっと採り入れられてもよいという意見があった。例えば、「ドラマを見ながら楽しく授業をしたい」という学生は次のように述べている。

・新しく話す言葉やドラマの意味、人と人との関係、どうしてドラマの中の人が怒っているのかを質問しながら、みんなが楽しく授業をしたいです。新世代の私たちに、もっと新鮮な教え方が必要だと思います。

(5) 学生が考える理想の授業のイメージ

学生が好きな授業をイメージして表したことばには、「楽しい」「面白い」のほかに次のような表現があった（表9）。これらのことばには、学ぶ側の教育観・学習観が表れている。

表9．学生の「理想とする授業」

いっしょに話し合う授業	（ことばの意味とかを学生と先生がいっしょに直し合っていく授業が好きです。）
気楽な授業	（世界中で起こっていることを授業の一部とすれば、新しい言葉と難しい文法がわかりやすくなる。）
先生の笑顔（がある）授業	（授業をしているようなしていないような、遊んでいるような遊んでいないような授業）
笑いながらする授業	（冗談を交えながら、つまらなくなったらちょっとだけは授業に外れた内容をしたり、日本語だけでなく日本文化などを授業中に教えてもらいたい。）
変化に富む授業	（授業の初めに、教科書の本文じゃなくて、おもしろい話題からでいいと思う。授業中、いろんな道具を使って、教科書の本文と一緒に教え、授業が終わるまでに、本日勉強した教科書の内容をだいたい復習していいと思います。）
自由自在な授業	（先生と学生間の言葉じゃなくて、一言で言うと社会的な言葉（友だちとしての言葉とか日常生活用言葉）…。）
みんな参加できる授業	（何かタイトルがあったらそれについて自分の意見を発表したり書いたりしてみんなで一緒にやる授業がほしいです。）

総じて、学生と教員が互いに交流しながら、ある話題について活発な意見交換ができる授業が望まれている。以下は、学生と教員の関わり方について述べられたものである。

・授業の内容もちゃんとできていて、先生と学生が授業に溶け込んで楽しく思えたら、それでいいんじゃないかなと思います。

・先生も学生も協力しながら、問題が出てきたら、課題として、まず学生が自らの思いを言ってから、先生から直してもらいたいです。

・クラスメートで交流が多いでしょう。先生も一緒に交流して、中で、間違えた言葉があったら、先生は正しい言葉を教えてください。

・自然なやり方、教え方が良い。先生も素直のままに、皆さんと楽しく、自然的な授業が大変良いと思います。

ただし、多数の学生にとって肯定的に受け止められていることが、ある学生にとっては否定的に受け止められていることもある。例えば、今回の調査では、多くの学生にとって、自由に意見交換すること、授業の進め方に余裕があることは「好きな授業」の要素であった。しかし、「文法の授業」が好きであると答えた学生は次のように述べている。

・一日にあまり進まなかったので、時間がもったいないなあと思いました。グループでの議論時間はわたしにはあまり効果がありませんでした。

また、学生と教員の関係についても、学習は個人的なことであると考えている次のような学生もいる。

・勉強は個人的なことですから、教師と関係がありません。ただ受けるだけ受けます。そういうわけで、どんな教え方でもいいんですよ。

(6) 学生にとっての教員の個性

具体的な教員の名前を挙げて「○○先生の授業」が好きだと答えた学生（３名）は、説明の分かりやすさ、面白く教えるための工夫（動詞の「て型」を歌って教える、など）を肯定的に評価していた（いずれも初級レベル）。

また、「個性がある先生の授業」が好きだと答えた学生は、次のように述べている。

・先生は授業中、十分に自分の個性を表現してもいい。自由に先生の個性で授業すれば、いちばんいい教育方法だと思っています。

次の学生の場合には、説明の分かりやすさよりも教員の話し方の特徴が肯定的に評価されている。

・かたい説明ばかりでも、話し方がおもしろい先生の授業（は好きだ）。

さらに、教員に関する記述のなかには、学生から見た教員の経験の差に言及したものがあった（２名）。

・先生自身の豊富な経験と幅広い知識量で、学生の勉強の興味をそそってきました。<プラス評価>

・新先生たちの複雑な説明。説明がむずかしい。<マイナス評価>

(7) 学生が「好きではない」授業

最後に、学生が好きではない授業の要因についてふれておきたい。

学生が好きではない授業は、「好きな授業」の性質を裏返したものである。つまり、自由に話す機会が少ない、教員の話し方や授業の進行が速すぎて十分に理解できない、教育熱心ではあるが学生の様子に目を向ける余裕がない、教科書に縛られて授業に個性がない、といった教える側の問題点が、「つまらない」「面白くない」授業だと学生に感じさせる要因である。学生が回答したコメントを要因別にまとめた（表10）。

ここで学生が「世間話」「おしゃべり」と表現しているいわゆる「雑談」については、授業のなかでどう採り入れられるかによって、学生の評価は異なる。次のコメントは「好きではない」授業について述べられたものである。

・授業とあんまり関係ない学生の話に耳を傾けて時間を消費する授業

・わたしたちとおしゃべりします。

表10. 学生の「好きではない」授業

話せない授業	・プリント（書く）が多い。 ・文法中心に傾いている。 ・テストのために勉強する。 ・先生の一方的な授業。やる気がなくなりやすい。
分からない授業	・質問に対して明確な説明が聞けない。 ・文法説明する時、黒板に例文を書くだけでは使い方が理解できない。 ・学生のレベルに合わせない、レベルの高い説明方法。 ・先生の話し方が速くてわからない。 ・速い授業。 ・説明があいまいな時、「日本だから、日本人だから…」などの表現はちょっと…。
余裕がない授業	・学生達の意見をよく聞かないで、授業だけ熱心に説明する。 ・世間話を全然しないで本だけで説明する。一直線に授業したら、頭に入らない。 ・むりやりさせること。 ・しばられた授業。 ・頭がかたい授業。 ・授業の中で余裕がないから興味を感じられない。 ・練習は、多ければ多いほどいいとは思わない。
個性がない授業	・教科書、プリントばかり。 ・変化がなく、いつもの通り。 ・本のとおりに授業する。 ・教育ルールどおりの授業。そんなことは家でしてもいい。 ・一般的な授業は×！　すこしでも話しをしたりおしゃべりしたりしながら、そのおしゃべりの中での単語などを習いたい。

4．考察

教える側の「理想とする授業」は、授業経験の多少によって特徴が見られた。実習生の理想とする授業は、学習者の情意面を重視するものであるが、経験3年以下の教員は学習者の認知面（理解度）と授業の雰囲気に言及していた。実際に授業を行う立場になると、まず、学生の出来・不出来が授業の成果を測る手がかりとして注目される傾向があるのだと思われる。また、「楽しい授業を…と思っても、脱線してしまうのが嫌」だ、という報告に表されているように、新人教員にとっては、予定された課題を時間内に終わらせねばならないという「時間」のジレンマ（吉崎1997、p.104）が大きな問題となっている。しかし、学ぶ側からすれば、できるだけ教科書に縛られない、柔軟性のある自由度の高い授業が求められており、教員の理想と学生の好きな授業との間にはギャップが見られる。これに対して、学生と教歴の長い教員の双方が「互いに交流のある」「共につくりあげる」授業を理想としていることから、経験豊富な教員は、どのような授業が成功する授業であるかについて、自らの経験によって獲得してきたいわゆる実践的知識をより多く持っているといえる。学ぶ側の「好きな授業」からは、日本の生活・習慣・文化など、日本と日本人について知り、意見交換ができるような活動が強く望まれていることがわかった。教員は日本語の授業のなかで積極的にこうした話題をとりあげるようにするべきである。

5．今後の課題

経験豊富な教員は、経験上のさまざまな「事例」や「エピソード」によって実践的知識を積み重ねている（田中1996、村岡1999）。これらの事例を集めて分析することにより、教員が理想的だと考えている「授業運び」「内容」「方法」が学生にとってどのような点で有効であるのかを検討し、教員養成や教員研修に活かしていく必要がある。

また、教材に文化をどのように反映させるかについて、その内容と方法に関する実践の事例研究から現在の問題点を明らかにし、新たな教材や方法の開発を進めていかなければならない。

謝辞

本調査の実施にあたり、日本文化言語学院の学生及び講師の方々、拓殖大学留学生別科の講師の方々、筑波大学大学院地域研究研究科の大学院生の方々にご協力いただきました。厚く御礼を申し上げます。

注

(1) 学習という現象を、個人的な行為ではなく、社会との関わりの中で他との関係を保ちながら自ら実践していく過程であるとする「状況的学習論」の学習観を、日本語教育の方法に反映させようという問題提起である。

(2) いわゆる就学生として来日している学生で、ほとんどの学生が日本の専門学校・大学・大学院へ進学することを希望している。

(3) 母語で書いてもよいと指示したが、全回答が日本語による記述であった。

(4) 調査対象とした学生が学んでいる日本語学校では、3か月を1タームとして初級Ⅰレベルから上級レベルまでの各クラスが設けられている。通常、6か月（2ターム）で初級Ⅰ・Ⅱを修了し、中級クラスへ進級する。

(5) 岡崎・伊藤・杉浦・高橋・張・徳永・村上（1999）によれば、日本語能力検定試験2級合格レベルのアシスタント英語教師を対象とした調査において、「分かる授業」がすなわち「満足する授業」ではないと報告されている。「分かりやすさ」と「満足度」との関係は、学習者の学習段階と関連があるものと思われる。

参考文献

岡崎眸・伊藤孝恵・杉浦まそみ子・高橋織恵・張穎・徳永あかね・村上律子（1999）「分かる授業は満足する授業か―社会人学習者の視点から―」『日本語教育』102号 pp.40-49.

小澤伊久美（2000）「パラダイムの転換期にある日本語教育―教育学的見地から日本語教育を考える―」『ＩＣＵ日本語教育研究センター紀要10』pp.29-39.

田中亜子（1996）「日本語教育における教師の実践知―筑波大学留学生センターの初級日本語授業を事例として―」西村よしみ（研究代表者）『日本語授業における学習者の認知過程と教師の意思決定に関する研究』文部省科学研究費補助金一般研究（c）研究成果報告書 pp.16-28.

西口光一（1999）「状況的学習論と新しい日本語教育の実践」『日本語教育』100号 pp.7-18.

日本語教育学会秋季大会予稿集（2001）pp.23-42.（シンポジウム『「文化」をどう教えるか―日本語教育と文化リテラシー―』資料）

飛田良文（編）（2001）『異文化接触論　日本語教育学シリーズ＜第1巻＞』おうふう

村岡英裕（1999）『日本語教師の方法論』凡人社

吉崎静夫（1997）『デザイナーとしての教師アクターとしての教師』金子書房